七夕day～星空は二人の想い～

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕ｄａｙ～星空は二人の想い～

【Ｎコード】

Ｎ４２１４Ｈ

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

七夕に花火大会に行こうとするが、大翔は花火が苦手で……。それが原因で二人の間に亀裂が…！！「響×大翔シリーズ』第６弾！！

前編（前書き）

ボーイズラブです。苦手な方は注意してください。

前編

「ねぇ～大翔っ行こうよっっ」
今日は七夕前日。
響は、楽しそうに俺の、腕を引っ張る。
「行こうって何処？」
どこって言わなくても、響の顔で分かっていたけど、訊いてみた。
「七夕祭り！！花火が上がるんだよっっ」
興奮しているのか、響は目をキラキラに輝かせている。
とにかく落ち着かせようと、俺は水を渡した。
「あぁ……分かったけど、もう少し落ち着かないか？」
「えっあ、うん……」
慌てて響は、床に座る。
恥ずかしそうに、座っているあたり、はしゃぎすぎた自分を恥じいたのかもしれない。
そんな響は可愛いけど。
「俺は行かない」
響のデートのお誘いをきっぱり断る。
「えぇっっっ！！！どうして大翔ぉ……」
それには訳がある。
何とも恥ずかしいことだが、俺は花火が大の苦手だ。
あの音を聞くと、体中がびくびくして……はっきり言えば怖いということだろう。
「その日は用事があってな」
何とも見苦しい言い訳だが、俺には思いつかなかったのだ。
響は俺の顔を上目遣いでのぞいてくる。
「とても大事な用事なの？」
しゅんとした声で聞いてくる響の声はまるで子犬のようで。
嘘をついている罪悪感があるが、カッコ悪い姿を見せるよりは…

…と、何としてでも嘘をつきとおす。
「あぁ。とっても大事な用事だ」
「……そっか、うん分かった。じゃあ今日は、その分ずっと一緒にいてね？」
意外に早く引き下がるのに違和感を感じたが、何とか花火を見なくて済むことに安心していた。

前編（後書き）

こんにちは。彩瀬姫です。
今回の「響×大翔」シリーズは連載にしてみました♪が、
忙しくて今日中に終わらないと思いますので、のんびり更新していきたいと思います。

中編

「う～ん。何しよっかな？ねぇー大翔はどれがいいと思う？」
明日いけない代わりに、今はファミレスでごはん中。
響はいつもどのメニューがいいか、俺に聞く。
「それぐらい自分で決めろよ。小学生じゃあるまいし」
そうだよねっと響は頷き、メニューを見ながら指差す。
「……ははは。そうだよね。じゃあこれにしよう」
そういうぐらいなら早く決めればいいのにと思う。
メニューを言い終わって、待っている時間。
「大翔、なんか欲しいものない？」
「なんだよ、突然」
「何でもない」
さっきから、響の様子がおかしい。いつもの響なら、食いついてくるはずなのにあっさり引き下がる。
何か俺は悪いことを言っただろうか？
ついキツイ言い方になってしまうのは分かっている。それは響も分かっていて、だから俺達は恋人関係でいられる。
俺の不器用なところも、あまりに響を好きすぎて独占欲丸出しのところも、響は好きだと言ってくれる。
その言葉が何よりも嬉しくて、泣きそうになったことも幾度かあり。
――――じゃあ俺は？響に好きって言ったことは？
ない、わけじゃない。好きって何度も言ったことがあるのに、なんでだろう。
何かが違う気がする。
その「何」かは分からないが。
俺は恋愛に不向きだ。いつの間にか響をしょんぼりとさせてしまう。

「後で、学校近くの公園に行かないか？」
俺は公園に誘う。7月は、蝉の鳴き声がよく響く公園。沢山の木に囲まれているところで、まるで森の中に公園があるようで。
蝉が煩いと評判で夏に来る人はあまりいないのだ。男同士だから外に出るとどうしても人目が気になるが、その場所では気にならない。
雰囲気という点では欠けているかもしれないが、俺達の唯一のデートスポットなのだ。
「えぇ？いいのぉっ」
「あぁ」
「わぁーーーい！！」
「しぃーーーーーーー！！」
「あぁっごめん」
響は慌てて自分の口を手でふさいだ。この会話は外でする会話じゃない。
もし誰か外で聞いてたら……。そういう心配が生まれるのだ。
でも逆にこれでいいこともある。
「なんか、いいよね。こういうの」
響がコソコソっと笑っている。
「あぁ。そうだな」
親密感がたまらなくいいのだ。二人だけしか知らない、秘密。
『俺達が恋人同士っていうこと』
言う気もないし、言いたくもない。この平和な温かい二人の世界にいたいんだ。
はしゃいでいる響を見て、そっと俺は笑った。

＊　＊　＊

ご飯を食べた後、人影のない道を手をつないで公園まで歩いて行った。
夏だから手をつなぐと汗をかくのだけど、響のそれは嫌ではない。
「あぁ～そろそろ夏休みだよ、ねぇねぇ、大翔。夏休みはどこに行きたい？」
「……そうだなぁ。静かなところがいいな、後涼しいところ」
「何か難しくない？」
「簡単なところと言えば、家しかないしな」
「う……ん」
どうも響の元気がない。
「どうしたんだ？具合でも悪い？」
「ううんっ。違うよっ」
「じゃあどうしたんだ？」
寂しそうに見上げてくる響。不安一色の目をしている。
「あ……えっとぉ…花火楽しみだなっと思って」
「えぇ？」
その言葉に俺は唖然とする。
「花火？」
「あれ？知らないの？今公園で花火上がってるんだよっ。大翔知らなかったんだ」
カチッ
何かが俺の中で固まった気がした。
――花火、はなび、ハナビ……。
恐怖心が蘇る。
「……ごめん。やっぱ公園はやめよう」
「えぇ…？」
「ごめん。今日は家に戻ろう」
響を引っ張って俺の家に向かわせようとするが、響はその場に立ったまま動こうとしない。
「……どうして？」

「……」
俺は口を閉じてしまう。
自分から誘っといて断るなんて、何やってるんだ俺はっ。俺は心の中で、怒りぶつける。
それと逆に、怖い怖いという恐怖心がやってくる。花火はどうして駄目なんだ。
長い沈黙を破ったのは響だった。
「……なんで、いつもそうなの？」
響は俺と繋いでいた手を離し、手を強く握りしめている。痛いんじゃないかと心配になるほど、強く。
響は泣いてるのだろうか？
下を向いていて表情が分からない。
でも、いつもと違う。そんな響の様子にただ俺は戸惑うことしかできなくて、次の言葉を待っていた。
「大翔は、いつもそうだよ。僕とデートしてくれない」
乾ききった声が聞こえる。
「今してるだろ？」
「いつも僕から誘うばっかじゃん」
「その…俺から誘うのは、恥ずかしくて」
恥ずかしいことを口にすることはできるのに、どうして花火が嫌いなことは言えないんだろう？
「じゃあ、どうしていつもデート断るの？」
「えぇ？」
「僕たち、付き合ってもう1年だよ？何回デートに行ったか知ってる？」
響の威圧感に押されて、必死に答える。
「えっと……」
家で過ごすことはあってもデートはあまりしたことがないような気がする。
ちゃんとした数なんて覚えてなくて…。

「いつも大翔が断るんだ。……正解は3回。でもね、ちゃんとしたデートなんて一度だってしたことないよっっ」
顔を上がった響は泣いてはいなかった。
響は怒っているのだ。
「大翔。僕は君にとって何？・・・友達？他人？それとも――」
残酷な言葉が響の口から吐き出される。
「いい加減にしろっ」って怒りを感じているはずなのに、なのに……どうしてだろう。複雑な感情が俺の中を動き回る。これは一体何だろう？
――俺は響が好きで、ただずっと隣にいたかった。それなのに俺は、響の気持ちがよく分からない。喜ばせたい、悲しませたくないと思って、いろいろ考えるのにいつもうまくいかない。
響は言葉にしてくれると嬉しいというけど、やっぱりどこか傷つけてしまいそうで、躊躇ってしまうところがある。
俺は何かが欠けているのだろうか？俺はどうすればいいのだろうか？
響に視線を向けると今度はなぜか笑っていた。
なんだろう。この胸の痛みは、いつも響の隣にいると苦しくなる、それとは違う。
嫉妬……違う。苦しみ……違う。
じゃあこの気持ちは何？
俺はまだその答えを出せずにいた。
「ねぇ……大翔、応えてよ……」
俺は一体どうしたんだろう。どうすれば、この複雑な気持ちは治まるのだろう。

中編（後書き）

こんにちは、彩瀬姫です。
更新停滞中です。すみません。
後編はできるだけ早めに更新したいと思いますっ。

後編

「大翔……」

何も答えない俺に、響は溜息をつく。

何かを諦めたかのような表情。

「もういいよ。大翔が何も答えないなら、それが答えなんでしょ？」

「えぇ？」

「分かったから……。僕、帰るね」

俺に背を向けて響は歩き出す。

何が分かったんだ？　響はなんの答えを出したのだろうか？

俺は気付いていなかった。だから、俺は響を追いかけた。

小柄な響に簡単に追いつく。それが気に食わなかったのか、響は速度を速める。

響の腕を掴んで止めさせようとする。

「おい。響」

「ついてこないでよっ」

響は俺の腕を振りほどこうとする。

「どうしてだ？」

俺はまだ気付かない。

響が考えていることを、心の傷を……。

「どうしてって？まだ気付かないの？」

響はピタッと足を止めた。止まった響の隣に俺も止まった。

ここは学校の、裏庭。なんでここに来たんだと一瞬疑問に思うが、すぐに忘れてしまった。

響が俺のほうに振り向く。――そして、響は俺の目を見て大きく言い放ったのだ。

「大翔のっどんかんっっ！！！」

さっきまで我慢していたとばかりに響な目から涙が滝のように流れていく。
怒っていた顔をしていたのに、今度は急に切なそうに俺を見つめる。
「僕はね。大翔と一緒にいたいの。でも、大翔が僕と一緒に気持ちじゃないなら、隣にいてほしくないの。――ねぇ？もう一度聞くよ？」
響は大きく深呼吸をして、俺に問いかける。
「大翔は、僕のこと、どう思ってるの？」
いつも響らしくない言葉を聞いて、俺はいあれっと思う。いつもの響だったら、
「ねぇ？大翔。僕のこと好き？」
って問いかけてくる。
そこで、俺は重大なことに気付いたのだ。
――俺は、自分から響にその気持ちを伝えていたのだろうか、と。
確かに、好きだったって言ったことはある。
でもいつも俺は、響に言ってほしいというときだけしか気持ちを伝えていなかった。
自分が言いたいときに自分から気持ちを伝えたことなんて、よく考えれば、ない。
もしかして、響は不安だったのだろうか？
俺からの気持ちを聞けなくて。俺からの言葉をほしがっていたのではないか。
本当に俺は鈍感だ。
響のことをちゃんと考えてあげられていなかった。
「響、好きだよ。好き、好きだよ。好きっ」

小さな子供が好きと言うように、何度も何度もその言葉を言った。
俺の頭に今まで言えなかった「好き」を沢山、響に伝えたくなった。
「好きだよ。響、愛してる」
「大翔……」
響は驚いたように、目を見開く。
「ごめん。響。いつも言えなくてごめん。好きだよ。愛してる」
「大翔ぉ……」
響は、俺の胸に飛び込んできた。
俺の胸の中にうずくまる響。
鼻ズズっとすすりながら、泣き続ける響。どんなに響を不安させていたんだろう。
「大翔ぉ……。あのね、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いい？」
落ち着いてきたのか、響は顔をあげた。
「うん？」
優しく、問い返すと。
「今日は何の日か知ってる？」
今日？七夕の一日前だよなぁ……。
その他になんかあったけ？
分からないとばかり、考えている大翔を見て、響はクスリと笑った。
「正解は、付き合って一周年記念日でした」
「あぁ！！！」
すっかりというか、完全に忘れていた。
そうだ、去年の今日、俺は告白された。偶然か分からないが、場所も学校(ここ)だった。
「大翔、やっぱり忘れていた。大翔の薄情者っ」
言葉と裏腹に、口調はとても嬉しそうなものだ。

「怒らないのか？」
恐る恐る聞いてみると、響は首をよくに振る。
「怒らないよ。だって今日は大翔から告白されたから」
「告白……」
確かに告白した。愛してるとまで言った。
恥ずかしいこの上ないが、響は嬉しいと笑っている。
幸せだ。
好きな人が今ここにいる。俺の胸の中に、いる。「好き」って言ってくれる。その分俺も「好きっ」て返して、自分から言葉にして伝えたいと思う。
そう、幸せに酔いしれたときだった。

ヒュ……――バンバンッッ！！！

花火が上がった。
ヤバいヤバい。俺の体は硬くなる。
怖い。
「うん？どうしたの大翔？」
硬直した俺を見た響は不思議そうに聞いてくる。
頑張って花火を怖いと見せないように、平静を装うっている、が。
それは空しいものとなる。

ヒュ……――バンバンッッ！！！

二度目の花火が上がった時だ。
体が震えてしまった。その振動は響も伝わったらしく、驚いたという顔をしている。
だが、響は何も口にしなかった。
花火が怖いの？っと揶揄することなく、響は俺に力強く抱きしめる。

響は俺より子供っぽいっとずっと思っていた。仕草も言動も。でも、もしかしたら、響のほうが、俺より大人っぽいのかもしれない。

「あっ花火終わっちゃったね」

「あぁ」

あっという間に花火は終わった。だけど、空はまだまだ輝いていた。

「星、綺麗だね」

花火の後ろには星が輝いていた。

花火の華やかさはなくても、とても綺麗だ。静かな自然の星のほうが俺は好きだ。

実は、俺が花火の嫌いな理由は音なのだ。大きな音を聞くとピクッとしてしまう。でも、もう大丈夫。俺の好きな人はそれを見ても、なお俺を好きだと抱きしめてくれたのだから。

「そうだな」

「そこは、響のほうが綺麗でしょうって言うところでしょ？」

響は、ゆっくりと目を閉じた。

それにこたえるように、俺も目を閉じ、響の唇にそっと触れた。

真っ暗な裏庭。

星と月の微量の光。

まるで、俺達を祝福するかのように、

――――二人を照らしていた。

後編（後書き）

こんにちは、彩瀬姫です。
今回の「響×大翔」シリーズはどうだったでしょうか？
忙しくて、なかなか更新できませんでした。
タイトルが七夕なのに、内容は七夕前日。しかも、実は、二人の1周年記念日でありました♪♪
タイトルを変えようかと思ったんですが、気に入ってるんでこのままにしておきます。
「響×大翔」シリーズ、初の連載。あまあまないつもの二人とはちょっと違う感じにしてみました。
気に入っていただけると嬉しいです。
来月も更新頑張ります♪

最後まで読んで頂き、有難うございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4214h/

七夕day～星空は二人の想い～

2010年10月8日15時43分発行